

## ハイデッガーのメタ存在論構想と『カント』書 —無についてわれわれが語るときにわれわれが語ること—

報告者 丸山文隆

(東京大学大学院博士課程 日本学術振興会特別研究員DC2)

### おことわり

この草稿は、ハイデッガー・フォーラム第八回大会における研究発表原稿の未完成草稿であり、多くの点（とりわけ、引用箇所訳文、或いは二次文献の参照指示）について十分推敲ができておらず、完全でないこと、あらかじめおことわり申し上げます。

### 1. 導入

#### 1. 1 問題設定と前提の提示：「カント」講義と『カント』書との差異を問う

所謂前期ハイデッガーに、イマヌエル・カントをめぐる二つのテキスト、すなわち1927/28年冬学期講義「カントの純粹理性批判の現象学的解釈」（以下、「カント」講義と略記する）と『カントと形而上学の問題』（1929年公刊；以下、『カント』書と略記する）とがあつて、これらはしばしばひとまとまりの考察として話題になる。しかしこの二つのあいだに、興味深い地点がひとつあると思う。それは、1928年夏学期講義「ライプニッツを端緒とする論理学の形而上学的始原諸根拠」（以下、「ライプニッツ」講義と略記する）における、「メタ存在論」、すなわち、「全体における存在者」を扱う問題系）の導入を伴う「形而上学」構想の提出である。ここで、ハイデッガーの、「基礎存在論」の概念は、あらたな位置を得ることになる。そうすると、これをはさんで二つテキストがある、ということは、この二つのあいだに、「メタ存在論」構想を含む、或る、語りなおし、再編成があつたことによって、カント解釈をその重要な部分としてもっていた基礎存在論という問題系に、或る変遷があつたのではないかという、疑いを呼び起こす。それを、精査する。

二テキストの相異として差し当たり表面的に、二点が挙げられる。それは、(A)「学」の理念の後退と、(B)「無」の概念の登場とである。すなわち、(A)『純粹理性批判』の課題は「カント」講義において「学としての形而上学の根拠づけ」とみられていたが、この定式化は『カント』書において「形而上学の根拠づけ」へと変化している（Glazebrook

(2000))。また、「カント」講義において(1927年夏学期と同様に)存在論は「存在の学」(GA25, S. 36)と言い換えられているが、『カント』書と同年の「形而上学とは何か」においてしばしば〈哲学と学との本質的な違い〉が主張されている。1929年において、学は話題としては相変わらず登場するけれども、哲学との関係について言えば、以前より疎遠になっているといえるのだ<sup>1</sup>。そして、(B)「カント」講義において、「無」は何度か話題になるが、それは常にカントからの引用として登場するばかりである。これに対し、『カント』書において、「無」は極めて印象的な仕方(第二章における『純粋理性批判』の段階的総括の最終段落、最終節において)言及される。われわれはこの二点について、((C)「全体における存在者」の概念との連関を精査しつつ)解釈を与えたい。

問いは、こうである。ハイデッガーの「カント」講義と『カント』書とのあいだにある二つの微細な差異が、当時の彼にとっての或るひとまとまりの関心事から発したものであるとすれば、その関心事とは何であり、どのようにこの二つを結果したのか。われわれはこの同一の関心事が(C)全体における存在者の問題系と関わりをもつのではないかと推測し、これを手がかりにしつつ、(A)学の理念がどのような位置をもつものであるかを解釈する。そして、(B)「無」の概念が登場するに至る理路を仮説として提示する<sup>2</sup>。

## 1. 2 還帰次元の特徴づけ:「全体における存在者」の概念の最低限の規定

以下「全体における存在者」に関してわれわれが考えるにあたって、「存在者の全体」と

---

<sup>1</sup> われわれは必ずしも、「学」という概念がこの時期のハイデッガーの関心の中心であったと主張するわけではない。われわれの主張は、この概念へと注目することがハイデッガーの関心事の変化を推定するために有益であるということであるにすぎない。ハイデッガーは前後の講義において(しばしばその開始にあたって)学の概念に言及しており、その都度それなりの関心をもってこの言及を行っていると考えるのが自然であるから、この主張は正当であると考えられる。

<sup>2</sup> ハイデッガーのカント解釈において何が問題であったのか。「カント」講義において、二つのことが問題になっていたと解することができる。すなわち、「アプリオリの学」と「現存在の有限性」とである。この二者が問題であるとは、「時間と存在」篇の方法論(存在論的認識の、学的徹底化)をカントの『純粋理性批判』に重ねることによってモデルとして提示し、この方法がハイデッガーの「存在一般の意味への問い」の目的のために十分適切なものであるかを吟味すること、このことが問題であったということの意味するの他にない。この際、「現存在の有限性」はまさに、上記方法の最大の困難として見出されたものであると解することができる。この点について、詳しくは丸山(近刊)を参照されたい。

「現存在の有限性」という困難に対処するため、ハイデッガーは「全体における存在者を扱う問題系」を考究することが必要であるとの洞察を得たとわれわれは解する。「全体における存在者を扱う問題系」をわれわれは「メタ存在論」と呼ぼう。このとき、「メタ存在論」は「基礎存在論」とともに「形而上学の概念」を成すと語られ、また、基礎存在論の「徹底化と普遍化」とが、基礎存在論から「メタ存在論」への「転換」ないし「転回」の内的必然性を洞察させると語られているけれども、このことは、上述の〈アプリオリの学〉の方法にとっての困難「現存在の有限性」への対処としての「全体における存在者を扱う問題系」の導入という理路を指し示していると解することができる。このような理路の内的必然性についてわたしは既に2012年6月30日の実存思想協会第28回大会の研究発表「メタ存在論を手がかりとした、ハイデッガーの基礎存在論と眼前性の問題」において解釈したので、今回は立ち入らない。

「全体における存在者」とを一旦区別する必要がある。「形而上学とは何か」(1929年)において次のように言われている。

われわれが存在者の全体をそれ自体決して絶対的に捉えないということがたしかなのと同様に、われわれはしかしどのようにか全体において露呈された存在者のただなかにわれわれが立たされていることをたしかに見出すのである。結局のところ、存在者の全体それ自体を捉えること (Erfassen des Ganzen des Seienden an sich) と、全体における存在者のただなかにおのれを見出すこと (Sichbefinden inmitten des Seienden im Ganzen) とのあいだの本質的な区別が存立している。前者は根本的に不可能である。後者は絶えずわれわれの現存在において生起している (geschehen)。 (GA9, S. 110)

差し当たり次のことを確認しよう。「全体における存在者」という名称は、まずは「気分」、「被投性 (Geworfenheit)」と関連している。「全体における存在者」は、しばしば、〈そのただなかに [われわれが] おのれを見出すところのもの〉である。

ここにおいて、「全体」とは、差し当たり現存在による企投 (Entwurf) のみにおいて包摂しうるものではなく<sup>3</sup>、むしろ被投性を通じて接近しうるものである、という主張が語られている、と仮定しよう。

「存在者の全体を捉えること」は不可能である。

「全体における存在者のただなかにおのれを見出すこと」は可能である。

そのうえで、われわれはこの主張がどのような理路から帰結したものであるかを推定しようと試みる。このことは、『存在と時間』(1927年)から1929年に至るハイデッガーの思惟の道筋が、(もしそれが合理的なものであったとするならば) どのようなものであったのかを推定する作業とともに行われる。

---

<sup>3</sup> このことと、後に言及する「存在者の全体への破り入り」の可能性とは、どのように両立するか、ということに関し、目下暫定的に見通しを述べておきたい。「存在者の全体のうちへの破り入り」とは、〈無のうちへとおのれを引き込み、保つこと〉により、〈全体における存在者のただなかでおのれを見出すこと〉が生起するが、このような生起を根拠に可能になっているような或る種の企投であると解しうる。この解釈をもとにすれば、結論は次のようなものとなる。すなわち、被投性を基礎とした(ないし、少なくとも被投性と分かちがたく結びついた) 上述の企投によって「全体における存在者」と関わることは可能であるが、被投性を媒介せず、端的に恣意的自由による企投において「全体」を問題にすることはできない。

以下われわれはまず、存在一般の意味への問いの道筋を確認し、この道筋のうちに超越論的観念論と経験的実在論との両立をめぐる難題を見出すであろう(第二節)。つづいて、カントの『純粋理性批判』の解釈の中心的課題がまさにこの対立であるとして解釈する筋を提出し、「超越論の対象=X」が「無」であるとするハイデッガーの主張の含意を解釈する(第三節)。最後に主に「形而上学とは何か」を参照しつつ、「無」を学によっては到達しえないもの、現存在の有限性の指標と解することにより、学の後退を解釈しうる理路を提案する(第四節)。

## 2. 〈存在一般の意味〉への問いの仕上げとそれを中心とした諸問題について

『存在と時間』「導入部」においてその射程を示され、続く本論(第一部第一篇および第二篇)においてその準備が完了した基礎存在論(Fundamentalontologie)<sup>4</sup>の最大の課題は、〈すべての存在者の存在の了解(Verstehen)の統一的な地平、すべての存在の共通の意味として時間(存在時性 Temporalität)を明るみに出し、そして、この統一的な意味に基づいた様々な了解が、様々な分節化さ(artikulieren)れることの解明〉、これである。(GA24、また丸山(2012)を見よ。)〈あらゆる存在者について、その存在が存在時性という唯一の地平からして了解されていることと、どのようにしてそれぞれ区別されて了解されているのかを、表明的な企投の遂行によって明らかにすること〉というこの課題は、1927年夏学期講義において存在論的学(ontologische Wissenschaft)の課題として、存在の対象化(Vergegenständlichung)という名称のもと定式化され、強調されることになる(GA24, S. 399; GA25, S. 26ff.; また丸山(2012)を見よ)。

「存在論的学」の理念において、〈存在者の全体を、先学問的に(vorwissenschaftlich)あらかじめ了解している企投〉と、これの学的分節化、という対が前提されている(丸山(2012)を見よ)。このとき〈全体をまとめて了解する企投〉が、本当に成立しているのかということが問題になる。以下、既になされた研究をもとにして述べるなら、〈全体をまとめて了解する企投〉だと思われていた〈先学問的無差別的な存在了解〉が、実際は〈全体をまとめて了解する企投〉ではなく、むしろ、〈自然(Natur)の存在〉は、或る仕方でこれをすり抜

<sup>4</sup> われわれはここで、1928年夏学期講義の定式化に基づいてこのように言う。すなわち、『存在と時間』において〈存在一般の意味への問い〉の基礎としての「現存在の分析論」が、「基礎存在論」と呼ばれていたのに対し、1928年夏学期講義においてはむしろ「現存在の分析論」をその基礎として包含する〈存在一般の意味への問い〉の全体が、「基礎存在論」と呼ばれているのである。

けているのではないか、という疑念が生じていたのである。具体的には、〈現存在と手許のもの (Zuhandenes) の二元論〉が想定されるが、これが破綻する。「自然の存在には、内世界性 (Innerweltlichkeit) は属していない」(GA24, S. 240)、すなわち、「自然」が発見され、内世界的に眼前存在する (vorhanden sein) ことは、可能なことではあるけれども、必然的なことではない (丸山 2012, 169f.)。自然という眼前のものは、或る主観のようなものに依存して存在するわけでも、内世界的な手許のものとして暴露されることに依存して存在するわけでもないものとして、みられている。眼前のものはそのようなものとして、それが暴露されることに先立って既に存在していたものとして見出される (丸山 2013, 177f.)。それゆえ、自然は、「そのものとして」、現存在やその暴露するはたらきに依存せず、眼前存在しているのであり、〈自然は、それが存在する限り、必ず、現存在によって発見されている〉と断言することは誰にも許されない。以上のような、いわば素朴な実在論が、われわれの存在了解のうちに存している、とハイデッガーは洞察したのである。この実在論と調和しないような仕方で眼前存在を特徴づけることは許されない。したがって、自然の〈それ自体での存在〉、すなわち眼前存在そのものの解明のために、(内世界性を本質的に伴う) 手許存在から接近する道はあらかじめふさがれているのである。

以上の議論が、第一のテーゼ「〈存在者の全体を捉えること〉は不可能である」の語っていることである、と解することは可能であるように思われる。

存在者は、われわれの認識如何に関わらず、それ自体で存在する。われわれが存在する限り、(他の) 存在者もまた存在しているけれども、存在者は、われわれに依存せずに存在している。だが、〈存在者の存在〉は、われわれに依存している。すなわち、われわれの了解のうちでのみ、「存在」といったものは総じて存立しうる (丸山 2013, 181 註 12)。

「ライブニッツ」講義における三つのテーゼは以下の通りである。

- 1、 存在者はそれ自体において、それがそれであるところの、またそのような仕方であるところの存在者なのであり、それはたとえば現存在が実存していない場合でもそのようなのである。
- 2、 存在は「存在する」のではなく、存在は現存在が実存する限りにおいてのみ、与えられる — 実存の本質のうちには超越が存する。超越とはすなわち〈内世界的な存在者に対する、そしてその傍らにおける、一切の存在〉に先行する、またこの一切の存在のための、〈世界の付与〉である。

- 3、 実存する現存在がおのれ自身に存在といった風なものを与える限りにおいてのみ、存在者はその〈それ自体 An-sich〉においておのれを告げることができる。すなわち第一のテーゼが同時に、総じて了解され、認識されることができる。(GA26, S.194f.)

第一のテーゼが上述の「素朴な実在論」を示しているのに対し、第二、第三のテーゼは、いわばハイデッガーにおける「超越論的観念論」を示しているように思われる(Blattner (1999))。

(A) 存在者はそれ自体であらかじめ存在しているが、(B) 現存在の実存においてはじめて〈存在者が存在する〉ということが知られる。(A)と(B)との差異は、存在論的差異の表現であると言えるだろうか。だが、存在論的差異の表現としてみた場合、(A)と(B)とは何かしら不正確な表現である。(B)において存在が名指され、(A)において存在者が名指されている、と簡単にまとめたくなるけれども、実際はどちらにおいても「存在者の存在」という同じことを言ってしまうっており、矛盾を避けることは難しいのである。〈存在者が存在する〉ということは、(A)〈現存在の実存〉に先行するが、また(B)後続しもある。この矛盾した事態が、どのように両立しているのか。より正確な表現が目指されてよい<sup>5</sup>。

〈超越論的観念論を、経験的実在論にも関わらず、言う〉ということこそ、ハイデッガーのカント解釈の中心であったといえる。カントにおいて超越論的観念論とは、有名な〈現象と物自体との区別〉の教説を意味する<sup>6</sup>。ハイデッガーは、「物自体」の概念についての考究においてカントが獲得した洞察を、形而上学における有限性の問題の重要性であると語る<sup>7</sup>。すなわち、知られている通り『物自体』の概念は「認識能力を制限する『限界

<sup>5</sup> 超越論的観念論と経験的実在論との両立の問題をハイデッガーに即して語ることは、独特の困難さがつきまとう。すなわち、所謂パズル・パッセージについて論じる多くの研究者は、池田の卓抜な指摘の通り、「存在論的差異」という根本的な教説に反した議論に陥ってしまっているのである。経験的実在論は、物が、現存在が存在するしないに関わらず、それ自体で存在すると語る。これに対して超越論的観念論は、現存在が存在する場合にのみ、存在が存在すると語る、と言いたくなる。(そしてまさに、ハイデッガー自身が、引用符つきではあるけれども、そのように語ってしまっている。上掲の1928年夏学期講義における定式は、『存在と時間』における不正確な表現をより正確に語りなおしたものであるとみることができよう。)だが、池田(2011)の指摘する通り「存在は存在するもの(存在者)ではない」。

<sup>6</sup> 「現象の超越論的観念論と言う場合、わたしはすべての現象をもってこれをすべて単なる表象とみなし、物自体とはみなさず、したがって時間・空間はわれわれの直観の単なる感性的形式に過ぎず、物自体としての客観の独立に与えられた規定ないし制約ではないとする学説を意味する。」(KrV, A369 見当; 牧野1989, 155を参照せよ。)

<sup>7</sup> 次の引用を参照せよ。「ドイツ観念論にはじまる『物自体』に対する戦いは、カントが戦いottaた次のことがますます忘却されていくこと以外の何を意味するだろうか。つまりそれは、形而上学の内的可能性および必然性、すなわちその本質は、有限性の問題がより根源的に仕上げられそして先鋭化して維持され

概念』(Grenzbegriff)としての機能をもつ」(牧野 1989, 105)。「物自体/現象」という対概念は、われわれの認識の有限性を意味するのである。「現象」という概念において言われている洞察とは、われわれは、物の創造者ではないので、それゆえ、物を、その「それ自体」において、究極的には、知りえないのだ、ということである<sup>8</sup>。われわれの有限性とは、われわれが物の実在の原因であるわけではない、ということである。物は、われわれに依存することなく、それ自体で、存在するのである。以上の有限性と、存在者に対する存在了解の先行性とは、どのように両立しているのかを言いたい。これは、超越論的観念論と経験的実在論との両立の問題である。

### 3. カントの超越論的観念論

『純粋理性批判』を解釈しつつ、ハイデッガーは「現象/物自体」概念に含まれる〈有限性と、存在了解の先行性との両立〉を適切に表現することを目指していたと考えられる。本節でわれわれは、この究明の結論として「無」の概念の登場を解釈する。だがそれに先立って、『カント』書のカント解釈の全体を簡単に確認し、「無」の概念が登場する「すべての総合判断の最高原理について」の位置と意味とを明らかにしよう。

#### 3. 1 カントの存在論的認識

『カント』書におけるハイデッガーのカント解釈の中心は、『純粋理性批判』の解釈であって、その際この著作の核心は「アприオリな総合判断は如何にして可能か」という問いに求められる。この問いは、ハイデッガーによれば、存在論的認識の可能性への問いである。すなわち、(1.) カントはそれ以前の独断形而上学からみずからを区別し、悟性(自発性の能力)のみによってではなく、常に感性(受容する能力)に依拠しつつ、認識を問題にしようとした。総じて認識は何らかの触発によってはじまる。(〈物〉の触発の先行性<sup>9</sup>。)だが、(2.) 問題になっているのは「アприオリな」認識、すなわち、あらゆる経験的触発に先行し、すべての経験的認識を可能にし、準備するような認識が、可能であるのかど

---

ることによって根本的に担われ維持されるのである、ということである」(GA3, S. 244 見当)。

<sup>8</sup> ハイムゼート(1981)、および丸山(近刊)の第二節における「現存在の有限性」についての記述を参照されたい。

<sup>9</sup> 感性は、存在者への現存在の依存性、被投性を表す。ハイデッガーは、すべての認識は第一次的には直観であると強調し、カントの根本的特徴をこのような〈存在者への依存性〉から出発して認識を解明しようとした点に求めるのである。丸山(近刊)を参照されたい。

うかということである<sup>10</sup>。ハイデッガーは、〈現存在は、存在者に引き渡され、存在者に依存しているけれども、存在を了解するのであって、この了解はあらゆる存在者への依存に先立っており、その限りで現存在は自由なのである〉という事態が記述されるべきであると考えていた<sup>11</sup>。

認識とは畢竟、直観である、とハイデッガーは強調する。それでは、アプリアリで、自発的な、あらゆる経験に先行する、(経験による限定を受けないという意味において)無限的な、自由な認識は、どのようにして可能であるのか<sup>12</sup>。現存在の有限性にも関わらず、いかにして自由なものとしての現存在は、存在者的経験を超越しているのか。現存在の存在者に対する或る優位はどのように特徴づけられるべきであるのか。

この答えは、第一に、純粹直観としての時間直観に基づく認識として与えられる。そしてこのとき、ハイデッガーは感性と悟性との二元論を根源的なものとしては認めない。すなわち、純粹直観である時間直観が、諸範疇(すなわち、存在者の存在機構を表現する諸述語<sup>13</sup>)の源泉であるはずだと解し、この導出が演繹論で語られ、また時間直観と諸範疇との協働が図式論において語られると解するのである。演繹論と図式論とにおいて、不十分な仕方であるにせよ洞察されているのは、或いは、洞察されていたはずであるのは、「超越」という統一的现象である。ハイデッガーは「超越の内的可能性の根拠」として、「超越論的図式性」を解釈する<sup>14</sup>。

ハイデッガーは『カント』書第二章Bにおいて、『純粹理性批判』における所謂存在論的認識の分析を五段階に分けて解釈しているのだが、この「第四段階」たる図式論(KrV, A 137ff./ B176ff.)が存在論的認識の最深の根源であって、続く「第五段階」たる「すべての

<sup>10</sup> 「先行的な存在了解なしに存在者への通路は開かれえない、すなわち、われわれに出会われうる存在者は、あらかじめ既にその存在機構に関して了解されていなくてはならない」(GA25, S. 55)。

<sup>11</sup> 「そのようなものとして存在者に引き渡されており、そして存在者の受容に依存している有限的なものが、いかにしてあらゆる受容に先立って、しかも存在者の『創造者』であることなしに存在者を認識できるのか、すなわち直観できるのか」(GA3, S. 38 見当)。この問いに「被投性を企投性に何とかして解消しようとする意志」(嶺 1991, 115)を見るのは恣意的とは言えないだろう。だが差し当たり、われわれはこの問いを拒絶したり擁護したりする前に、これがどのような問いであるのかを考えるべきではないか。

<sup>12</sup> これをカントの問いであるとするハイデッガーの解釈には反論がありうる。福谷(2009)

<sup>13</sup> 『対象一般』の概念としてのカテゴリー；牧野 1989, 177。

<sup>14</sup> 「超越論的図式性」において遂行されるのは、「純粹概念」の「純粹感性化」である(102)。すなわち、「概念に像を与えること」であって、「図式形象」をみずからに与えることである。この図式形象は「純粹形象」(103)でなければならず、これは、「時間」に他ならない(104)。「すべての有限的認識作用は思考的直観作用として必然的に概念的であり、概念的表象作用は畢竟(本質的にいえば)図式性である。それゆえ眼前にあるもの、たとえばこの家の直接的知覚においてはすでに必然的に家一般といったものへの図式化する先行的視野が存しておりこのような〈先行的に立てる表象 Vor-stellung〉からのみ遭遇するものが家として示され、「眼前にある家」の光景を提供することができるのである(GA3, S. 101 見当)。このような、「先行的に立てる表象」として、存在者の存在論的諸述語(すなわち諸範疇)は図式形象をみずからに与える作用である。



総合判断の最高原理について」(A154ff./B 193ff.)は『純粹理性批判』全体が説明してきた存在論的認識の簡潔な総括であるとされる。

ハイデッガーは「すべての総合的判断の最高原理」、すなわち「経験一般の可能性の制約は、同時に経験の対象の可能性の制約である」(A158/B197)という命題を、次のように解する。

すなわち、「経験の可能性」は二つのことを意味する。まず、(1.) 経験されるものではなく経験することという意味において(GA3, S. 117f.)。このとき、可能性は現実性と対立する意味において解される。このとき「経験の可能性」が意味するのは、経験がどのような本質を可能的にあらかじめもっていないかということ、経験することの本質(*essentia*)または事象性(*realitas*)、すなわち、〈経験されるものが与えられるとすればそれは何であるか(Wassein)ということ〉の諸規定である。この「事象内実」(GA9, S. 149)は、〈何であるか〉を与えるだけであって、そもそも経験が存立すること、存在者が〈あるということ Daßsein〉を与えるものではない(vgl. SuZ, S. 366)。「それにもかかわらず、諸現象の統一は、事実的で偶然的な〈与えられるということ〉に必然的に依拠しているがゆえに、いかなるときも制約されており、そして原則的に不完全である」(GA9, S. 148f.; GA27, S. 275 をも見よ)。

そして(2.) 経験することではなく経験されるものという意味において(GA3, S. 118)。このとき上記の意味と組み合わせられつつ、「経験の可能性の制約」が意味するのは、可能的な真なる経験がそれによって成立するような「地平」としての「或るもの」が要求されるということである。

ハイデッガーによれば、最高原理は、この(1.)と(2.)とが同時に双方とも成立している、という積極的意味を有する。「経験することを可能にするものは、同時に経験可能なものないし経験されるものをそのようなものとして可能にする」(GA3, S. 119)。すなわち、(1.)「有限的認識を本質において可能ならしめるものの合一的全体」は、(2.)対象が与えられることをあらかじめ準備するような地平である或るものをおのれに与える、ということである。ハイデッガーは(2.)において言及された「地平」である或るものについて、続く節においてさらに説明しているようにみえる。われわれはこの「地平」である或るものに注目し、ここにおいて「現象/物自体」の対に関するひとつの結論を求めようと思う。

### 3. 2 超越論的对象=X

「根拠づけの第五段階：存在論的認識の完全な本質規定」第25節における、次の記述に注目したい。

存在論的認識は単に存在者を創造することはないというだけでなく、それは一般に主題的にそして直接的に存在者に関係することはない。

しかしそれでは何に関係するのだろうか。この認識作用において認識されるものは何なのだろうか。或るひとつの無である。カントはそれをXと呼び、そしてひとつの「対象」について語っている。(GA3, S. 120f.)

すなわち、カントの所謂「超越論的对象=X」が「或るひとつの無 (ein Nichts)」であると名指されている (Sherover 1971)<sup>15</sup>。

上記のことは、次のことを言っているだけのように見える。すなわち、存在論的認識、すなわち存在了解は、存在者を主題的に問題にするものではないのであり、存在者を認識することではないのだから、それは或る意味で、無を認識することだといえるが、この認識は、なんといっても、存在を認識することである。そうするとこの記述は、〈存在了解は、存在者をではなく、存在を了解する〉という『存在と時間』以来のお決まりの主張を、「存在」を「無」と称することにより変奏してみせただけであるように見える。そして、カントの所謂「超越論的对象=X」が、そのような存在である、と主張していることになる。だが、本当にそれだけなのか。「超越論的对象=X」が、無である、ということに、それ以上の含意を読み取ることはできないだろうか。

「物自体」と「超越論的对象」との関係について、カント研究はこんにちまで長らく議論を積み重ねている (牧野 (1989) 等を見よ)。ここでその詳細に立ち入ることはできない

<sup>15</sup> ハイデッガーが『カント』書において「無」に言及しているのはあと一箇所だけである。すなわち、次の文章である。「われわれが存在者の眼前存在を支配することができずとすれば、存在者が受容に依存しているというまさにそのことが、存在者にはあらかじめそして常に対立の可能性が与えられることを要求する」。続いて、「しかしながら、或るものを対立させる能力において、つまり純粋な対応 (*eine reine Korrespondenz*) をはじめて形成する〈或るものに立ち向かうこと *Zuwendung-zu* ... 〉において、受容的直観作用 [すなわち、有限的認識 (vgl. S. 71)] は遂行される。そしてその場合、われわれが自らの方から対立させるものは何なのだろうか。存在者はそれではあり得ない。しかし存在者ではないとすれば、その場合まさに無である。この〈或るものを対立させること〉が或る〈おのれを無の中へと引き入れて保つこと *Sichhineinhalten in das Nichts*〉である場合にのみ、表象作用は、無の代わりに、そして無のうちで、無ではないもの、すなわち、もしそのようなものが正に経験的におのれを示すならば、存在者のごとき或るものを出会わせしめることができる」(GA3, S. 72 見当)。

が、ハイデッガーの以下の解釈姿勢が明白かつ根本的な間違いであるということは、いまだ証明されていないように思われる。すなわち、彼は基本的に「超越論的对象=X」において「物自体」と同様のものが名指されていると解し、しかし、前者には、後者の概念に含まれる「無限的認識」の存在へのコミットメントは含まれないと考えている (GA26, S. 210; Han-Pile 2005, 95)<sup>16</sup>。ハイデッガーは、差し当たり「現象」を、単なる表象に過ぎないのではなくて、「存在者そのもの」であると強調する。このとき、「物自体」とは、神的悟性 (すなわち無限的認識) という可能的観点においてみられた同じ存在者であると解される (GA9, S. 148 をも参照せよ)。存在者を現象として規定するということが人間的認識の有限性の指標として機能する限り、「物自体」から「叡智的なもの」という積極的規定、すなわち神的悟性へのコミットメントを取り除いたとしても、「物自体」は完全に消去されて構わないことにはならず、なお或るものが残らざるをえないが、これをハイデッガーは (おそらくカントにならって)<sup>17</sup>、「超越論的对象=X」と呼んでいる。このXは何らかの認識の「対象ではない」とハイデッガーは強調する (GA3, S. 122)。なんとなれば、有限的認識にとっての「ひとつの可能的現象の総体」(福谷 (2009) を見よ) に対する単なる論理的相関者<sup>18</sup>であるXが同時に或る認識の「対象である」のであれば、〈対象であること〉一般をあらかじめ知る何らかの存在論的認識の射程に再びこの対象は含まれなくてはならないが、このような対象の対象性を認識するこの認識の身分が問題になるからである。この存在論的認識はもはや人間的ではあり得ないが、ハイデッガーは (カントに比して、より一層、<sup>19</sup>) 人間的でない認識を認識として問題にすることを強く拒否する。(このXは、決

<sup>16</sup> B・ハン＝パイルの見解を参照しよう。彼女はH・アリソンを援用しつつ、「物自体」を「非感性的認識様式」の論理的「相関者」として「超越論的对象=X」と一旦等置する。「超越論的立場」とは、「超越論的諸条件の括弧入れ」を意味する。(われわれが問題にすべきものは、存在者だけであって、その他には何もものもないのだから) この立場設定は「空虚」(Carman 2003, 171) ではあるけれども、「重要な倫理的役割」をもつものである。すなわち、「われわれの認識が物自体そのものに対するものであるという『形而上学的実在論』を予防する」という役割がある (Han-Pile 2005, 94)。(概して「形而上学的実在論」とは、カントの所謂「超越論的実在論」と同義であると解されてよいと思われる (Lafont)。)

<sup>17</sup> このような、物自体と超越論的对象との区別をハン＝パイルは主にハイデッガーに帰し、その意味でカントに対立させている (Han-Pile 2003, 95; ところで、この箇所ハン＝パイルの GA26 への参照指示は頁づけが誤っていると思われる。正しくはどちらも GA26: 210 とすべきである)。だが、福谷 (2009) の解釈によればむしろこの区別を行ったのはカント自身である (「二：物自体と『純粋理性批判の方法』、特に 44-51 頁を参照せよ)。福谷はまさに、「対象一般をフェノメナとヌーメナとに区分する根拠について」章を『物自体』の『超越論的对象』への解消として読むこと」を主張しているのである (44-45 頁)。

<sup>18</sup> ハン＝パイルはアリソンを引きつつこのように表現しているが、この「論理的」という語の地位は、後述するカントとハイデッガーとにおける感性与悟性との区別の問題に深く関わるため、注意が必要である。正確に言えば、このXが「論理的」相関者でありうるのはカントの場合だけであり、ハイデッガーにおいては異なった表現が求められる。

<sup>19</sup> カントのコミットメントをどう評価するかということについては解釈が分かれる。(ハイムゼート、福谷。) 少なくとも、どの程度コミットメントをもつか曖昧であるカントに比して、ハイデッガーはより一

して対象化されえない。すなわち、学の対象たりえない！！) それゆえ、ハイデッガーは正確に、この「対象でないX」が、そもそも「存在者ではない」と主張するのである。したがって、このXは「無」だと言われなくてはならない。このような「無」は、存在するものではない。だが、存在しないものとして、しかしわれわれの有限性について語る際に言及しなくてはならないような、内容あるものとして<sup>20</sup>、差し迫ってくるような、そのような「或るもの」である。ハイデッガーはこの「或るもの」を、「超越において、そして超越を通じて、その[超越の]地平としてまなごしうるような〈抵抗 Dawider〉」であると語っている (GA3, S. 122f.)。 (前項でみた、) 最高原理後半においていわれていた〈「地平」であるような或るもの〉とは、この無であると解しうる。

カントは感性形式として時間と空間とを規定し、もっぱら悟性により思惟されたものとしての物自体に関し、その時間空間的な身分を問うことを禁じた。カントにとっては明快に、有限的認識を超えたものには、〈直観によっては与えられないが、悟性のみによって思惟されうるもの〉という位置が与えられていたのである。ここで有限性は、感性と悟性との区別により表現されている。だがハイデッガーは感性と悟性とのこの区別を根源的なものとしては認めないのであるから、存在論的諸述語 (諸範疇) は感性形式との統一において考察され、ともに「可能的経験の総体」を形成するが、このとき〈この「可能的経験の総体」がまさに有限である〉という事態を表現する際に困難が生じることになる。〈有限的認識は存在者の眼前存在の (少なくとも、唯一の) 原因ではない〉ということの表現として、それゆえ、〈存在者ではないし対象化することも許されえない、地平として対象を与えることを可能にするのみである「或るもの」〉への指示が要請されるのである。可能的経験の総体に、外部がある、ということが言われなくてはならない。「外的な諸現象の根底にも、また同じく内的な直観の根底にもひそんでいる超越論的客観は、物質でもなければ、思考する存在者自体そのものでもなく、〈物質ならびに思考する存在者についての経験的概念を手渡してくれるような諸現象〉の、われわれには未知の或る根拠である。」 (KrV, A 379f.)

---

層、無限的認識の措定に関して消極的な姿勢をみせているということは明らかであろう。

<sup>20</sup> ハイデッガーは、その意義が見失われた古代における無の概念として、次のような規定を紹介している。すなわち、「形成されない質料」、「それ自体を、形態をもった、したがって或るひとつの見相 (エイドス) を呈する存在者へと、形成しえないもの」、これである (GA9, S. 119)。(また、これと関連して福谷 (2009) の所説を参照されたい。福谷は、最高原理における「制約」を「質料に先行しうる『形式』」というカントの存在論的姿勢の表示として強調し (21 頁)、ライプニッツ=ヴォルフ学派の『質料が形式に先行する』という考え方) に対立させるのである (54 頁)。(このような質料である無は、「像のうちで、すなわち或るひとつの直観されうるものうちで、企投しえない」といわれる (GA9, S. 149)。(これに対し、世界は、像として機能する。GA9, S. 158.)

「無のうちへとおのれを引き込み保ちながら、現存在はその都度既に全体における存在者を越え出ている (hinaus sein)。この、〈存在者を越え出ていること〉をわれわれは超越と呼ぶ」(GA9, S. 115)。全体における存在者は、〈そのただなかにわれわれ人間的現存在がおのれを見出すところのもの〉であるが、これは、現存在に無が開示されることにおいてはじめて、〈全体における存在者として im Ganzen als solches〉明らかになる。存在者を、〈ひとつの全体において〉明らかにするということは、その可能的外部からの反照なくしては生起しえない。この関係は、「ひとつの可能的経験の総体」と「超越論的対象=X」との関係に重ね合わせられる。無において、現存在は、〈存在者としてのおのれ自身をもそのただなかに見出すことになるような或る全体〉をはじめて見出すのだが、この全体が〈ある〉ということ、さらに〈このようにある〉ということは、或る根源的な意味で(すなわち、何らかのより根底的な〈必然／偶然〉の範疇に還元して説明することが不適切であるような意味で) 偶然的である<sup>22</sup>。〈可能的経験〉があるのだから、当然それに対応するようなXが要請される、という連関以上の、〈可能的経験に対してXが実際に与えられる〉という事

<sup>21</sup> ハイムゼート説。原因としての〈実体〉。睿智の原因。これが、無。「不安の無の明るい夜において、存在者をひとつの存在者として顕わにするような根源的な開顕性が生じる。それはすなわち、〈それが存在者であり、無ではない〉ということである」(GA9, S. 114 辻村訳を参照せよ)。この一文は次のことを言っている。すなわち、〈存在者を存在者として明らかにする〉ということは、〈それが存在者である〉という事態が適切に捉えられるということであるが、この事態は「無」と対照するという仕方ではじめて適切に捉えられる、ということである。(無をはじめて与える明るさは、他のあらゆる存在者的な明るさとは異なっているが、しかし一つの明るさなのだ、ということが、「明るい夜」という表現の含意であると解する。)そして、思うに、そういった、無、において、存在者が存在者である、ということが、分かるのだし、また、存在者が存在者である、ということが、分かるときに、無が、開示されている、ということ。(ここで、もう一つのことが言われている。すなわち、存在者が存在する、ということについて、われわれは、「なぜ？」と問うことが、なぜか、できる、ということである。)つまり、〈存在者が存在する、〉ということは、無を背景にし、無と対照されることによって、開示される)ということが意味しているのは、このとき開示されているのは〈存在者は、存在しないのではなく、存在する〉ということなのだ、ということである。「存在者が存在する」ということは、「存在者が(総じて)存在しない」という或る可能性が了解されることと対になってはじめて、正しく了解されるということだ。

<sup>22</sup> それゆえたとえ次のような意味でこの偶然性を解してはならない。すなわち、いま存在者が存在する(そして、そのことがわれわれに知られている)けれども、或る可能世界において、存在者は存在しない(ないし、われわれがそれを知ることが成立しない)のであって、この可能世界を参照することにより、存在者が存在しないということ(ないし、存在者が存在するということが知られるということが成立しない)が可能であったことがいえるのであり、それゆえ〈存在者が存在する(ないし、このことがわれわれに知られている)〉ということは偶然的である、と。上記の可能世界は上記の想定そのものによって、既にわれわれの了解の中に含まれてしまっている。したがってわれわれの存在了解の外部を表現するものではない。ハイデッガーが問題にしているのは、〈まさに現に存在者の存在が明らかになっている〉という事実とともに、或る根源的な(これ以上理由づけをすることができない)気分がわれわれに与えられるということであり、この気分がわれわれに、〈存在者が存在する〉ということについて「なぜ？」と言わせるということである(GA9, S. 121)。すなわち「なぜそもそも存在者があるのであって、むしろ無ではないのか」と(S. 122)。むしろこの根本的な「なぜ」が生じるがゆえに、われわれは〈存在者が存在する〉という事実を「偶然的」と呼びたくなるのではないだろうか。

態の偶然性をハイデッガーはみている。次の引用を参照せよ。

[...] 問題なのは、根源的統一、そして〈いわば身体において束縛されていてそして身体における束縛性において、存在者との或る固有の拘束性のうちにあり、この拘束性のただなかにおのれを見出す〉という人間の関係性の内在的構造なのであって、それは、それを見下ろしている精神という意味においてではなくて、〈現存在は存在者のただなかに投げ出され、自由なものとして存在者のうちへの破り入りを遂行するのだけれど、この破り入りはつねに歴史的でありそして究極的な意味で偶然的である〉という意味においてのことなのです。(GA3, S. 290)

#### 4. 学、すなわち存在者の全体のうちへの破り入りと、無

前節までで明らかになったことをもとに、さらなる展望の概略をテーゼ風に提示しよう。

- (1.) 学の本質に属する「存在者の全体のうちへの破り入り」は、現存在の超越の構成成分であり、存在者を存在者としてあらわにすることである。<sup>23</sup>
- (2.) 「破り入り」は、「究極的な意味で偶然的」である。また、無とは、この偶然性を表示するものである。そして、無とは、超越に与えられる地平である。<sup>24</sup>
- (3.) 破り入りは、無を前提とする。<sup>25</sup>
- (4.) 破り入りを可能にする無は、人間の自由の事柄ではない (GA9, S. 115)。<sup>26</sup>

<sup>23</sup> すなわち、以下の引用を参照せよ。「人間の実存によって、次のように存在者の全体 (das Ganze des Seienden) のうちへの破り入り (Einbruch) が起こる。つまりいまや始めて存在者は、それぞれ異なった広さにおいて、明瞭性の異なった段階に従って、確実性の異なった程度において、それ自体において、すなわち存在者として露わになるのである」(GA3, 228)。「この [学という] 『営為』において生起するのは、人間と呼ばれるひとつの存在者が、存在者の全体 (das Ganze des Seienden) のうちへと破り入ること以外の何もでもないのであって、しかも、この破り入りにおいて、そしてこの破り入りを通じて、存在者が、それがそれであり、またそれがそのようなところのものうちで、破り開かれる (aufbrechen) のである」(GA9, S. 105)。「破り入りにおいて、それとともに研究しつつ対決することが生起するところのものは、存在者それ自体であり、そしてそれを超えては、無である [すなわち、何もでもない]」(GA9, S.105)。「現存在の無において、全体における存在者はその最も固有な可能性からして、すなわち有限的な仕方において、おのれ自身へと到来する」(GA9, S. 120)。

<sup>24</sup> これについては、前項を参照せよ。

<sup>25</sup> すなわち、以下の引用を見よ。「ただ無が開かれているがゆえにのみ、学は存在者それ自体を研究の対象にすることができる」(GA3, S. 121)。

<sup>26</sup> 「われわれは、われわれがまさに自身の決定や意志によってわれわれを根源的に無の前へと運びこむことができないまでに、有限的なのである。[...] われわれの自由 (Freiheit) にとって、もっとも固有でもっとも深い有限性が拒まれている」(GA9, S. 118)。

(5.) 哲学は、無を扱うが、「破り入り」を本質とする学は、無を扱えない。(学の本質が対象化であるならば、無は決して対象化しえない。Vgl. S. 115)<sup>27</sup>

以上の五つのテーゼにより、冒頭の問い〈ハイデッガーの「カント」講義と『カント』書とのあいだにある二つの微細な差異—すなわち(A)学の後退と(B)無の登場と—が、当時の彼にとっての或るひとまとまりの関心事から発したものであるとすれば、その関心事とは何であり、どのようにこの二つを結果したのか〉に答える準備ができた。

ハイデッガーの「カント」講義から1929年に至る思惟における関心事とは、〈現存在の有限性〉の問題系に他ならない。この問題系とは、(A)学の方法のみによって存在の問いを問い進めるために必要な〈あらかじめ存在者の全体を包括している先学問的存在了解〉が成立しないということの解明から生じたものであり、〈現存在の日常的存在了解は、存在者の存在に対しどの程度まで先行しているのか〉を画定することを目指すものである。この考究はカントの『純粋理性批判』をハイデッガー自身の問いと重ね合わせて解釈しつつ進められることになった。ハイデッガーは自らの問いを『純粋理性批判』にしたがって定式化した、それによれば存在論的認識は〈みずからに図式形象を与える超越論的構想力の超越の運動〉へと極限化されるが、その際この超越はみずから可能的経験に本質を与え、みずからの外なる「超越論的対象=X」に関わる。(B)ここにおいて〈存在論的認識が決して自己原因的で存在者を産出する力能ではなく、みずからを超えた或るものと関わらなければならないということ、すなわち存在論的認識の有限性〉の指標である「超越論的対象=X」は、存在論的認識の外部であるがゆえに「無」と呼ばれなければならない。この無を名指すことによって、ハイデッガーの「存在の学」という理念の撤回は決定的なものとなる。学は現存在の自由の作物であり、対象化をその本質とするが、1929年のハイデッガーは無が現存在の自由を拒むものであり、対象化しえないものであるということを強調するのである。

(了)

凡例

- ・ 引用における強調は、断りがない限り引用文に由来する。
- ・ 引用文中、[大括弧]によって引用者が語句を補うことがある。

<sup>27</sup>学は無を思惟しようとし、と、ハイデッガーは語るのである (GA9, S. 106)。

- ・ 〈山括弧〉はもっぱら、意味の区切りを表示する際にのみ用いる。

**【文献表】(現時点で参照指示されていない著作も含む)**

**第一次文献(略号に、場合によっては巻数を添えて指示する。)**

GA: Martin Heidegger, Gesamtausgabe, V. Klostermann.. 訳出に際し、ハイデッガー全集(創文社)を参照した。

SuZ: Martin Heidegger, Sein und Zeit, 18. Auflage. Max Niemeyer Verlag, 2001

KrV: Immanuel Kant, Kritik der reinen Vernunft. Meiner, 1976. 訳出に際し、カント『純粹理性批判』(上・中;原佑訳、平凡社ライブラリー、二〇〇五年)を参照した。

**第二次文献(著者もしくは編者の姓と発行年とによって指示する。)**

安部浩『「現」／そのロゴスとエートス —ハイデッガーへの応答—』晃洋書房、2002年  
有馬善一「ハイデッガーにおける〈自然〉の問題」、日本哲学会編、『哲學』第44号、1994年。

池田喬 2011:『ハイデッガー 存在と行為』, 創文社。

稲田知己『存在の問いと有限性 —ハイデッガー哲学のトポロギー的究明—』, 晃洋書房、2006

景山洋平 2013:「自然の経験と共生の創造」, 電子ジャーナル『Heidegger-Forum』Vol. 7「自然と技術への問い」所収。1-21頁。

金成祐人「ハイデッガーにおける世界と気分」、日本現象学会編『現象学年報』第28号、2012年、79-86頁。

齋藤元紀:『存在の解釈学』。

酒井潔 2001:「モノ論・基礎有論・メタ有論—もうひとつの〈ライブニッツ-ハイデッガー問題〉—」,『思想』第九三〇号所収、四十七-七十一頁。

榊原哲也 1994:「フッサール —超越の問題をめぐる—」,大橋良介編『ハイデッガーを学ぶ人のために』世界思想社, 所収, 146-166頁。

瀧将之 2006:「気分ともう一方の〈終わり〉としての誕生 —ハイデッガー根本気分論への一アプローチ—」,『論集』第24号, 東京大学大学院人文社会系研究科哲学研究室編, 所収。

田鍋良臣 2012:「ハイデッガーの超越論 —「存在の問い」の答え方—」(実存思想協会編実存思想論集XXVII『生命技術と身体』理想社、153-171頁)。

轟孝夫 2007:『存在と共同 ハイデッガー哲学の構造と展開』法政大学出版局

長縄順 2009:「ハイデッガーにおけるメタ存在論と根本気分」(『文化学年報』第五十八輯、同志社大学文化学会発行、二五一-二六八頁)

仲原孝『ハイデッガーの根本洞察 「時間と存在」の挫折と超克』昭和堂、2008年

マルティン・ハイデッガー『道標』ハイデッガー全集第9巻,(辻村公一・訳)創文社。

ハインリヒ・ハイムゼート 1981:『カント哲学の形成と形而上学的基礎』(須田朗・宮武昭訳)未来社。

平田裕之「ハイデッガーにおける科学と『運動』」,『紀要. 哲学科 46』(中央大学文学部、2004年所収、69-96頁。)

福谷茂 2009:『カント哲学試論』, 知泉書館。

細川亮一『意味・真理・場所』

牧野英二 1989:『カント純粹理性批判の研究』法政大学出版局。

丸山文隆 2012:「ハイデッガーの存在一般の意味への問いと「存在論的な学」—1927年夏学期講義の方法と困難—」, 東京大学哲学研究室『論集』30号, pp. 160-173。

丸山文隆 2013:「ハイデッガーの存在一般の意味への問いと超越の問題系」, 東京大学哲学研究室『論集』31号, pp. .

丸山文隆 (近刊予定):「ハイデッガーの存在一般の意味への問いの仕上げとカント解釈」, 日本現象学会編『現象学年報』29号掲載予定。

Allison, H. E. 1983: *Kant's Transcendental Idealism*. New Heaven, CT: Yale University Press.

Bast, R. A. 1979: *Der Wissenschaftsbegriff Martin Heideggers im Zusammenhang seiner Philosophie*, Stuttgart-Bad Cannstatt



- Blattner, W. 1999: *Heidegger's Temporal Idealism*. Cambridge University Press.
- Blattner, W. 2006: "Laying the Ground for Metaphysics: Heidegger's appropriation of Kant." (In *The Cambridge Companion to Heidegger*. Edited by Ch. B. Guignon, Cambridge University Press, 2nd Edition 2006. pp. 149-176.)
- Blattner, W. 2007: "Ontology, the A Priori, and the Primacy of Practice" (in *Transcendental Heidegger*, edited by S. Crowell and J. Malpas, Stanford University Press, 2007. pp. 10-27)
- Carman, T. 2003: *Heidegger's Analytic: Interpretation, Discourse, and Authenticity in Being and Time*. MIT Press.
- Cerbone, D. R. 1995: „World, World-Entry, and the Realism in early Heidegger,“ in *Inquiry* 38 (4), 401-421.
- Crowell, Steven Galt: „Metaphysics, Metontology, and the End of Being and Time “, in *Philosophy and Phenomenological Research*, vol., LX.2, 307-331.
- Crowell, Steven and Malpas, Jeff (eds.) 2007: *Transcendental Heidegger*, Stanford University Press.
- Dahlstrom, Daniel O. 1994: "Heidegger's Kant-Courses at Marburg," in Kisiel & van Buren (1994).
- Glazebrook, Trisch 2000: *Heidegger's Philosophy of Science*, Fordham University Press, New York
- Görland, I. 1981: *Transzendenz und Selbst*, Vittorio Klostermann, Frankfurt am Main.
- Han-Pile, Béatrice 2005: "Early Heidegger's Appropriation of Kant," in *A Companion to Heidegger*, edited by H. L. Dreyfus and M. A. Wrathall, Blackwell Publishing Ltd.
- Kisiel, Th. & van Buren, J. (eds.) 1994: *Reading Heidegger from the Start*. State University of New York Press.
- Köhler, Dietmar 1993: *Martin Heidegger. Die Schematisierung des Seinssinnes als Thematik des dritten Abschnitts von „Sein und Zeit“*, Bouvier Verlag, Bonn, 1993.
- Lafont, Cristiana 2007: "Heidegger and the Synthetic A Priori", in Crowell and Malpas (2007).
- McNeil, William 1992: „Metaphysics, Fundamental Ontology, Metontology 1925- 1935.“ *Heidegger Studies* 8, pp. 63-79.
- Murnsky, M. 2002: *Heideggers Aneignung der Kantischen Grundlegung der metaphysik im Zusammenhang mit der Konzeption von Sein und Zeit*, Verlag: Lang, Peter Frankfurt Frankfurt a. M.
- Philipse, H. *Heidegger's Philosophy of Being*, Princeton.
- , 2007: "Heidegger's „Scandal of Philosophy“: The Problem of the Ding an sich in Being and Time," in *Transcendental Heidegger*(ed. S. Crowell and J. Malpas), Stanford: Stanford University Press, 169-198.
- Schalow, Frank 1994: "The Kantian Schema of Heidegger's Late Marburg Period," in Kisiel & van Buren (1994).
- Sherover, Ch. M. 1971: *Heidegger, Kant & Time*, Bloomington/London.
- Uscatescu Barrón, Jorge 1992: *Die Grundartikulation des Seins: Eine Untersuchung auf dem Boden der Fundamentalontologie Martin Heideggers*, Königshausen & Neumann, Würzburg.